

# 街場の就活論 vol.14

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ  
団 遊

## 「まだ、大丈夫」

### 「全員を、幸せにします」

最近、企業の新卒採用活動の支援をしている仲間がこんなことを言っていた。「今の時代は、採用コピーを一本決めて、求める人物像を伝える時代じゃありません。個性尊重と言っては言い過ぎですが、コピーも複数走らせて、より多くの人を受け入れられる土壌を見せる時代です」。

新卒採用活動をする企業は、自社が求める人物像や企業姿勢を伝えるために、採用コピーを考案し、色々なシーンで活用、展開するケースが多い。自動車のホンダが「負けるもんか」をキャッチフレーズに、消費者とコミュニケーションをはかっているが、あれと同じようなものだ。例えば、

「仕事を選ぶこと。それは、生き方を選ぶこと。」  
(SAZAVY グループ)

「前にしか、進まない。」(コクヨ)

「良い服は、世界を変える。あなたが、世界を変える。」(ユニクロ)

「本命の、君へ。」(フジテレビ)

など。

従って、新卒採用活動を制作面から支援する各社

にとって、これまで、第一関門がこのキャッチコピーの考案といえた。ところが、この流れに変化が起きているというのが、冒頭の仲間の指摘だった。学校や専攻、男女、志向性によって複数の入り口を設け、それぞれにコミュニケーションプランを立てて展開する方が、より多くの人にリーチできるのだという。

「なるほどな」と思う事例もいくつか思い出されるので、頷きながら、さてこれは一体何が起きているのか？ と考えてみた。すると、前号に引き続き、これはまたもや「決断の先送り」支援ではないかという考えが浮かび始めた。

\* \* \*

### 「いつ決めるの？」「まだでしょ！」

就職先選びというのは、高校、大学選び以上に慎重を期す決断である（と考える学生が多い）。昨今のように、ブラック企業、倒産、リストラと、いささか誇大気味なネガティブキャンペーンがマスメディアで展開されると、まだ社会を知らない学生が慎重になるのも無理はない。そのような状況下で、本命企業を決めることは、根拠がないがゆえ

にとっても難しいことだ。

加えて、新卒採用活動のために開発されたキャッチコピーは、

「おまえを待っている！」や

「キミがやらなきゃ誰がやる！」的な、情熱的ともいえるが、いささか押し付け気味なものも多い。これは、冷静に見ると、転校初日に、

「あなたが好きだ！」

とラブコールを受けるようなもので、警戒心が働くのも無理はない。「そんな甘言にはだまされない」という心持ちである。

人生の第一歩目、できれば失敗したくない、という気持ちは分からなくはない。まして、何につけても「自己責任」で片付けられる世の中である。それならば、自らと深く向き合った上で確信を持って就職先は決めたいと思う。ところが、社会経験のない学生が、自らと深く向き合ったところで、そもそも将来の夢やビジョンが見えるわけがない。その結果、このような状況下にある学生にもっともフィットするコミュニケーションが、

「まだ決めなくていいよ」

に傾いてきているのではないかと思うのだ。

「決められないよね、その気持ち、わかるよ」と言ってもらうことが、一番学生の心に響く。

\* \* \*

### 手遅れの寸前が、一番金になる

「まだ大丈夫」というのは、世代を問わず、人に受け入れられやすいコミュニケーションであることに、疑いはないだろう。

「どれだけ太っても、40代ならまだ大丈夫」

「50歳で独身？ぜんぜん大丈夫」

「70歳からの保険加入？まだまだ大丈夫」

現実的に大丈夫かどうかは別として、渦中当事者は、そう言っても励ましてもらおうと、嬉しいものだ。そして、そのような状況で決断を究極まで先延ばしにさせて

「ほんとに、そのままでもいいの!? ヤバイよ、もう」

と煽り高額商品を購入させる、というのは、豊かになった日本の消費喚起方法のひとつの大きな軸になっていることは、世の中を見渡せばすぐ分かる。その考え方の応用が、新卒のコミュニケーションにも出始めているのではないか？ という風に思えたのだ。

「決められないよね、その気持ち、わかるよ」

と共感し、

「だから今はまだ決めなくていいよ。入ればキミに合う働き方がきっと見つかるから」

と決断の先送りを奨励する。しかし実際に会社が個々人に合った仕事を作ってくれるわけはなく、結果、若年者の離職率ばかりが向上する。その状況を、おじさんたちは

「いまどきの若い者は…」

と嘆き、その一方で若手の突き上げがないことに、少しばかり安堵する。団塊世代を中心に突き進む、目指せ「逃げ切り」、「後は知らんぺ」の法則である。

\* \* \*

### 必ずしも就職する必要はないが——

多くの大学生にとって、就職活動は、人生ではじめての大きな決断のときだと思う。まず、就職するか、しないかを決めないといけな。その後、ど

の企業に行くかを決めないといけない。その割に情報が豊かなわけではない。限られた、それも装飾された情報の中で、決断しなければならない。だがこれらは、今に始まったことではなく、ずっと繰り返されてきたことだ。

そこで大切なのは、自らの決断を「良いもの」にすることだと思う。決断した時点では、良いも悪いもない。決断は時間をかけて、成功になったり失敗になったりする。

決断は重ねるほどに上手くなる。だから決断を先送りにさせる取り組みは、大げさに言えば、人間を弱くする取り組みのように、僕には思えてならない。その一端を、就職活動の小さな出来事に感じた、仲間との会話だった。

文／だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性化など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。